

## 宗教的伝統について

安 富 信 哉

只今ご紹介いただきました安富です。

今日は宗教的伝統について、少しお話しさせていただきますと思います。よく、「伝統の町京都」といわれます。私もこの地に住んで二十年になりますが、実際にそう思います。二十年前といいますと、ちょうど皆さんがお生まれになった頃ですが、その頃の京都は今日のようにビルが建ち並ぶということではなくて、瓦屋根が多くていかにも古都というイメージがありました。

伝統工芸展をみるとか、京都の食べ物ひとつ取っても、そこには千年の伝統に培われた京都

ならではのものをみると、よくあります。

例えば京都のお弁当は非常にきれいで、色彩も豊かで味もあっさりしていて、素晴らしい一箇の芸術品だと思わされるのがよくあるのですが、私は田舎者ですから、そういうことがよくわからず、弁当といえば食べることにしか頭になくて、味わうとか色を見て楽しむということがわからないので、だめだなあと思うことがあります。お弁当ひとつの中にも深い伝統が息づいているということになると、いったい自分はどれくらいその伝統が理解できているだろうかと思うと、内心恥ずかしいものを感じることがよくあります。

私の田舎は新潟県、昔の言葉でいえば越後です。最近是新幹線も通って少し都会になりましたが、京都などと較べるとまだまだ問題になりません。昔は越後の地というと、流罪の地です。さまざまな犯罪者が流されてきました。一带は芦原がずっと続いている、つつが虫病などという風土病もあったわけです。そこに日蓮上人とか親鸞聖人とかが流されていったという、さいはての流刑地であったのです。そういう所ですから、文化的伝統というのはみるべきものがないのですが、しかし、宗教的伝統は昔からあった所だと思えます。

宗教的伝統というのは、浄土真宗の信仰のことなのですが、最近はやや稀薄になってきてい

## 宗教的伝統について

ます。それは世代間で、宗教的伝統というものを伝承していくことが、うまくいっていないからだと思います。昔はどの家庭でも囲炉裏があって、そこに家の人がみんな集まって、お嫁さんもご主人もおじいちゃんもおばあちゃんも、みんながいろんな話をします。そこにアット・ホームな雰囲気がありました。そういう中で、お寺の話とか親鸞聖人の話とかが話題になっていたのです。ところが囲炉裏が消えると、家族がばらばらになってしまっただけでみんなが個室にこもるようになります。

映画の「トラさん」は東京の下町の話ですが、あの中でも全然仕切りのない室の中でみんなが話したり、時にはけんかしたりしながら、熱い人情が通っていたというノスタルジーを味わせてくれます。

そういうことで、昔とは大分変わったということを感じさせられるのですが、それでもたまたに田舎へ帰りますと、まだ宗教的伝統が生きているなということに、ふっと触れるような時もあります。

私の家は真宗の寺なのですが、田舎の寺の最大の行事は報恩講です。これは親鸞聖人のご命日にちなんで、毎年一回報恩のお講をするのですが、お寺だけでなく、在家でもおこないます。

だいたい十月、十一月の頃に催されます。昔、句仏上人という方が、

しぐるるや越こしの村々お講どき

という歌を残しておられますが、この時期になると氷雨の中、田圃の中に点在しているお寺で報恩講が開かれるのです。私も先日田舎の寺に帰って、報恩講のお勤めをしてきました。お講が終わってお説教がすむと、お斎まゐが出ます。そこで老人の方たちと一緒にお酒を飲みながらお話しするのですが、その時に親鸞聖人の御同朋御同行の思想についてお話しくださるおじいちゃんがおられたりして、伝統はまだ生きているなと思わせられることがあります。お寺の行事もだんだんと習慣化してしまっただけになってきているのですが、それでもそういう伝統に触れて、はっとさせられることがあるのです。

土徳というもの、越後の宗教的伝統ということを思わせられたことでした。

宗教的伝統といえますと、私たちの祖先がそれに生き、それに死んでいった、そういう歴史のことを思わせられるわけです。その歴史というのは必ずしも平坦ではなくて、その中で私たちの祖先が必死になって戦ってきた歴史のことです。ちょっと歴史を振り返ってみると、宗教的伝統を守るために、どれだけ多くの血が流されたことかと思わされます。伝統を守るという

## 宗教的伝統について

このために、いろいろなドラマがそこで展開されてきたのです。

越後ですと、親鸞聖人が宗教的弾圧をうけて流されて来て、五年間ほど滞在して、そこでいろいろと教えを説かれました。石を枕に雪をしとねにしたと言われています。そういう親鸞聖人のご苦勞を、炉辺でおじいちゃんやおばあちゃんが若い人たちに伝えてきました。

またある人は、自分の檀那寺が火事になった時、みんなして大変な目をして仏様を救い出したり、焼け落ちたお寺を再建するために、どんなに苦勞したかということをお話しされることもあるでしょう。

また別の人は、明治時代の廃仏毀釈の時に、仏教や真宗の伝統を守るために、どんなに苦勞してきたかということをお話される場合があるかもしれません。

つまり私たちにあって、宗教的伝統ということは、平坦な道ではなくして、そこに法義相統し、仏法を伝えていくための戦いの歴史であったということが、思われるわけなのです。

それでは、どうしてそんなに苦勞し、血を流してまでもそういった伝統を守ってきたのか。それはやはり、伝統というものが生きる支えであるからです。伝統があればこそ、その中で生きその中で死んでいくことができる。

人間が生きるためには大地が必要ですが、存在のためには精神的な大地、生きる立脚地というものも必要なのであって、そういうものがひとつの伝統なのです。

私たちは大地で生活しているわけですが、大地に支えられているということには、なかなか気付きません。ところが地震がやってきたりしますと、改めて不安になって、そういう時に初めて大地の存在に気付くというようなことがあります。

伝統もこれに似ていると思うのです。伝統が脅かされる危機がやってきて、初めて伝統の大切さに気付くということがあると思うのです。伝統というものが、私を支える立脚地であるということに気付かされるのです。私たちの祖先が、どうして伝統というものを血を流してまで守ってきたのかと思うと、やはりその苦勞の上に私たちの生活の全体があり、それがなくなってしまうと生活の根拠を失ってしまうということがわかってくるのであって、そこになぜ伝統を守ってきたのかという答えがあります。

私自身のことを振り返ってみましても、そういう宗教的伝統に育まれたということは明らかになわけです。私は真宗の寺に生まれまして、現在大谷大学という真宗を建学の精神としている大学に奉職していますが、普段は自分が宗教的伝統に育まれているということが、なかなか見

## 宗教的伝統について

えません。ところが自分の存在の大地が揺るがされた時に、それが見えてくるわけです。自分にはこれがあった、自分にはこれしかなかったという形で、見えてまいります。

そういう体験を、実は三年ほど前に持ちました。その時、私はアメリカのウィスコンシン大学に客員研究員として行きました。シカゴから一時間四十分ばかり飛行機に乗っていくと、マシソンという町がありますが、それがウィスコンシン州の州都で、そこにある大きな大学です。四万人くらい学生がいると思います。非常にリベラルな土地柄で、アメリカの大学には珍しく、仏教科というものがあります。そこで浄土教についてのセミナーが持たれまして、私もずっとそこに参加していたわけです。

その間いろいろ失敗談や苦勞話があるのですが、自分にとって支えになる信念、自分を支える宗教的伝統ということがいかに大切かということを、思い知らされたのです。宗教的伝統というのは存在の立脚地ということですが、アメリカ人のよく使う言葉でいえばアイデンティティー（自己同一性）という言葉になります。それが非常に大切だということです。アメリカという国では、このアイデンティティーということを大切にしないと、どうにもならないのです。

アイデンティティーというのは、「私は何々である」ということです。「私は光華女子大の学生である」といえば、「私は光華女子大とアイデンティファイしている」ということですし、「私は女である」といえば、「私は女とアイデンティティーがある」ということです。

アメリカという国はそれが非常に大切な国で、自分のアイデンティティーを確認していかなければ、とても生きていけないというを感じさせられることが多いですし、またアイデンティティーを求められることも多いのです。身分証明書のことをアイデンティティーカード、略してIDカードといいますが、あちこちでこのカードの提示を求められることが多いのです。つまり始終「あなたは誰ですか」ということを問われるのです。

それはアメリカ合衆国が、移民の国であるということに関係があると思います。日本語では合衆国というように、民衆の衆の字を当てていることからわかるように、本当に沢山の人がいますが、それがみんなあちこちの国からやって来た人たちです。そういう新世界に住む時に、自分の存在の相としてのアイデンティティーということが非常に問題になってきます。つまりユダヤ人であるとか黒人、日本人といった民族的なアイデンティティーをどう見つけていくかということが必要になります。民族的なアイデンティティーだけでなく、宗教的なアイデ



## 宗教的伝統について

ンティティが非常に重要になるのです。

アメリカにはピューリタンの伝統もあるしカトリックの伝統もある。一方ではユダヤ教の伝統もあって、あんなに科学の発達した国で、なぜ宗教的な伝統が生きているのかというと、そこで生きるためには、意識的に存在の根を求めなければどうにもやっていけないからです。伝統というものがもともとそこにあるのではなくて、自分で求めていかなければならないのです。

私は期間としては短かったのですが、ご縁があってアメリカの仏教科の大学院のセミナーで、自分が真宗についてお話しするという時に、宗教的伝統とそれをしっかり持つことの大切さを気付かされました。

人間というのは、自分の存在が何かの拍子に大きな危機に見舞われた時、失われた存在の根を回復しようとするものであるらしいのですが、その場合、新しい何かを求めるといっても、すでに自分の中にあつたものを再発見していくことが多いようです。それは伝統への回帰といってもいいかと思えます。

そういう危機に出会って伝統に回帰していった人には、何人かの人が浮かびます。私は以前

英文学を専攻していたことがありますが、英文学者にT・S・エリオットという人がいます。彼は第一次世界大戦を体験して、ヨーロッパが没落していくということを痛切に感じて、「荒地」という詩を書くのですが、その時に彼が一番求めたのが、本当に自分の存在の根としての伝統を回復することであつたわけです。エリオットはイギリス人で、文芸評論家でもあり、詩人でもあります。エッセーに「伝統と個人の才能」という一文を書いています。近代文明がヨーロッパを破壊し伝統が消えていく中で、エリオットは自らの伝統の回復を叫び、それがさまざまな著述となって著されていったのです。

日本でいえば、例えば夏目漱石という人がいます。漱石もイギリスに留学して英文学を研究するのですが、そこで初めて西洋というものを体験して、アイデンティティーの危機に襲われるのです。それで結局彼の見出したアイデンティティーの回復は、「自己本位」——自分中心でいこう——ということに あつたのです。今までは弱小国日本に大変劣等感を持っていて、ヨーロッパやアメリカなどの欧米崇拜をしていたのだけれど、自分は自分らしくあればいいというところに気付いたのです。皆さんよく知っている『坊ちゃん』という小説にはいろんな人が出てきます。その中で「赤シャツ」のことを揶揄しますが、「赤シャツ」というのは西欧崇拜

## 宗教的伝統について

をしていた日本人の一つの象徴なんでしょう。それを否定していくということが漱石の中にはあるわけで、自分らしき、自分の伝統ということをや彼の場合なら「禪」というところに回帰させていくわけです。

T・S・エリオットの場合はイギリス国教会というイギリス独特の信仰に帰っていきまじ、漱石の場合は禅的な思想に帰っていきます。それは新しく求めるというのではなくて、はじめからあったものです。それを存在の根として求めていき、そこに初めて自分というものを発見し、安らぐことができたのです。

伝統といいますが、私どもの日常生活の中では、一般に習慣とか因襲とかしきたりなどと同じように考えられる場合が多いと思います。しかし私は、それらは別のものだと思うのです。ことに、こういう場所ではこういうことをしてはいけないとか、場所がらをわきまえずというようなしきたりといわれるものと、伝統とは違うものだと思います。

日本人にとっては、場所というものが非常に重要な意味を持っていると思います。昼間は会社で上役にべこべこしている人が、夜の宴会ではがらっと変わってしまうように、場所によって行動していくということがあります。田舎の私の寺でも、檀家の人が訪ねてくる時には、お

寺だから言葉遣いや作法に気を付けなければならないので、寺には来にくいということを開かされたりします。そこに日本の社会の一面があるかと思えます。

私のアメリカ人の友人が、日本の文化はコンバートメントの文化だと言ったことがありますが、コンバートメントというのは、仕切られた列車の一室のことをいうのですが、つまりお茶室に行った時にはそれにふさわしいように振舞い、別の場所ではまた別の形で振舞う、それに加えて、旅の恥はかき捨てということも含まれているようです。

習慣というものは、それをわきまえない者にとっては、大きな束縛です。

文芸評論家小林秀雄が「伝統について」という短い文章の中で、次のように言っています。

伝統に関するいちばん悪い考へ方は、伝統といふものを習慣と同じ性質のものに考へる事である。

今日伝統の問題が喧ましいが、さういふ考え方から、はっきり逃れてゐる人は少いやうに思はれる。

伝統と習慣とは、見たところ大変よく似てゐるが、次の点でまるで異つたものだ。

僕等が無自覚で怠惰でゐる時、習慣の力は最大であるが、伝統の力が最大となるのは、

## 宗教的伝統について

伝統を回復しようとする僕等の努力と自覚においてである。

習慣はわざわざ見付け出して、信ずるといふ様な必要は少しもないのだが、伝統は、見付け出して信じてはじめて現れるものだ。

従ってさういふ事に努力しない人にとっては、伝統といふ様なものは全く無いのである。

習慣も伝統も断絶する事のない流れであり、両者が自ら見事に調和して、人々が伝統の回復なぞ叫ぶ必要のない健全な時代、そんな事を考へてみても安易な空想に過ぎない。

伝統は、これを日に新たに救ひ出さなければ、ないものなのである。それは努力を要する仕事なのであり、従って危険や失敗を常に伴った。これからも常にさうだろう。少くとも、伝統を、さういふものとして考へてゐる人が、伝統について、本当に考へてゐる人なのである。

この短い文章を書いたのが、一九四一年です。そういう時代の文脈で考える必要もあるとは思いますが、習慣というものは無自覚なものだけでも、伝統というものは自覚的に探さなければならぬものなのだという事は、非常に重要な指摘であると思います。伝統というのは

そこにあるものではなくて、探さなければ見えてこないものです。そしてその伝統を探し求めることが、同時に私たちの存在の根を探し求めることであるわけです。

小林秀雄はここで、宗教的伝統について言っているわけではありません。それは小林秀雄にとっては、第一次的な関心ではなかったように思うのです。しかしその指摘は重要です。

宗教的伝統に行き当たった文芸評論家というと、今思い浮かぶのは亀井勝一郎という人です。皆さん方の世代にはあまりなじみがないかもしれませんが、伝統というものを自分の存在の根に求めて、そして仏教を発見していったという方です。それに至るまでの紆余曲折とかドラマを、亀井さんは一冊の書物に著しています。『我が精神の遍歴』という回想録がそれです。この本は亀井勝一郎におけるアイデンティティーの発見に至る軌跡を書いたものです。

これを読んでみますと、やはり小林秀雄がいったように、よほど努力しないと伝統——宗教的伝統——というものは見えて来ないということがいえると思います。彼の場合は仏教に帰っていくわけですが、彼はそこに自らの帰る場所というか、本来の自己を見出していったわけです。その精神の遍歴がどのようなものであったかを、簡単に紹介しておきます。

彼は函館に生まれ、父親が銀行の頭取で大変なお金持ちの家に育ちます。おばあさんがメソ

## 宗教的伝統について

ジスト派のキリスト教の洗礼を受けた人です。亀井少年は子どもの頃から、おばあさんからいろいろと宗教的教育を施されます。非常に近代的な家庭であったと思います。彼は少年時代にひとつの体験をします。中学校に入学してから、昔の友だちに会ったところ、その子はポロポロの着物を着て、手にはひびが入っていて、地下足袋をはいている。自分はというと、立派なラシャの服を着て皮靴をはき、身なりも非常に小ざっぱりと豊かなよそおいをしている。その時に貧しい同級生が「君はいいな」と言ったといふのです。それで非常にショックを受け、心の中にトゲのように刺さっていきます。富める者と貧しい者との葛藤が世の中には厳然とあり、自分は貧しき者の味方にならなければいけないという、負い目の意識を抱きます。そしてやがて東京帝国大学に入学するわけです。美学を専攻しますが、負い目意識がずっとあるので、労働運動——マルキシズムの運動——に入っていきます。しかし自分がプロレタリアートだという意識を持って、そういった労働運動をやっていたのではなくして、自覚された意識ではなくてヒューマニズムというか、何か負目の意識によってやっていたのです。そうすると大学で勉強しているということにもあまり意味が感じられなくなって、退学します。そして当時危険思想とされていたマルクス主義に関わっていき、治安維持法にひっかかって逮捕さ

れ、二年半にわたって拘留されます。その間劣悪な条件の刑務所の中で頑張り通すのですが、途中で嗜血して、死の恐怖を体験するのです。そして「転向上申書」を出します。「転向」というのは、政府や警察という権力の威力によって自分の信念を曲げることです。昔のキリシタンでいえば、「ころび」ということになるでしょうか。

死の恐怖によって転向し、マルキシズムを捨て、保釈の身になります。大学もやめ、結核にもなり、いってみればすべて失ったわけです。負目の意識からは解放されますが、今度は転向ということが彼を苦しめるわけです。信念を曲げただけでなく、同志を裏切ったという新たな大きな負目を感じるようになります。マルキストの中には作家の小林多喜二のように、最後まで非転向を貫いて、そのために虐殺されてしまった人もいるわけで、そういうことのために、第二の罪の意識が芽生えてきます。第一の「富める者」という罪の意識を償ったのが、マルクス主義であったのですが、それから転向したという第二の罪の意識は癒されることがなかったのです。それで、自分は生けるユダであるという意識を持つようになります。ユダというのは、銀貨三十枚でキリストを敵に売った人です。

その煩悶の中で、彼は魂の安らぎを求めて大和の古寺を巡って、仏像の鑑賞をしていくので



## 宗教的伝統について

す。それを通して、自分は罪深い人間だけれど、それを微笑んで見守ってくれる大和の仏たちに非常に惹かれていきます。白鳳の、天平の、あるいは大化の諸仏の中に、一条の光を見出していきます。その彼の抱いた心の安らぎが一冊の本となって著されます。『大和古寺風物誌』という本です。こうして彼はマルキシズムから仏教へと、宗教的な精神の転回を遂げるわけです。彼はこれを、「宗教的回信の第一歩」と呼んでいます。

ただこうしてお寺を巡っていくうちに気付かされてきたのは、仏たちは見守るだけで、語りかけてくれないということでした。それだけでは満足できなくなって、今度は大乘仏教の経典を読んだり、親鸞の『歎異抄』を読んでいくのです。とりわけ親鸞には、自らの帰る場所を見出したようです。こういうことを亀井は言っています。

人生にはふしぎな邂逅があるものだ。それは求めて得られるものでもなく、求めずして得られるものでもない。或る刹那に、彼方より殺到してくるもののごとくである。私が親鸞の著作を読むやうになったのはかなり以前からだが、それが明確に意味を持つに至ったのは、戦争の末期から敗戦へかけてである。この時期における親鸞との邂逅こそ、戦争において私の遭遇した最重大事件であったやうに思はれてならない。

『我が精神の遍歴』にこのように書かれています。亀井さんはこういう形で宗教的伝統にひとつの落ち着く場所を見出したようです。しかしそれに出会うまでには、大変な苦勞をしてゐるわけです。

宗教的伝統に出会うのは、容易なことではありません。伝統というものはそこにあるものだけれども、しかし自覺的に求めていかないと出会えないものなのです。

私は亀井さんが親鸞と出会ったということを言いたかったわけではありません。伝統に出会うということが、自己の回復であるということと言いたかったのです。

私たちの人生において、どうしてもしなければならぬこと、それは自分に出会うことです。それが私たちの生涯にかけられた、ただ一つの仕事ではないかと思えます。亀井さんの精神の遍歴も、そのための苦勞であったのです。自分を見つげずにおかないし、見つかった時には本当に安心を得ることができません。そういう人の顔は、非常に美しいと思えます。

アイデンティティーの求め方は、人によってさまざまだと思います。どうすれば自分が自分らしくなれるのか。

ある人にとっては、詩を書くことが最も自分らしくなれることであり、ある人にとっては音

## 宗教的伝統について

楽をやることでそれであるかもしれません。ある若者はオートバイに乗ることで、自分らしくなれる、という場合もあると思います。

詩にしても、音楽にしても、オートバイにしても、これらは宗教とはなんの関係もないようですが、それが自分のアイデンティティーの確立の方法だと自覚された時に、どこかで宗教と結び付くということもあるのではないかと思います。

数年前のアメリカのベストセラーで“Zen and the Art of Motorcycle Maintenance”という本があります。これは父親と息子がオートバイに乗りながらアメリカをずっと旅して、自己発見をしていくという、魂の遍歴を書いたものです。オートバイと禅という、最も離れているものがそこで結び付いているということが面白いと思います。

では、宗教であれば、どんなものでもアイデンティティーの確立のために役に立つかといえ、そこがやはり問題だと思います。

宗教意識の中にも、習慣的な宗教と、本当の存在の根に根ざす伝統的な宗教というものがあると思います。

少し話がそれると思いますが、日本人の宗教意識というのは、新年には神社に初詣をし、夏

になればお盆でお寺にお詣りし、冬になればクリスマスで教会に行き、また暮れには除夜の鐘を撞いて一年をしめくくるといふ、そういうサイクルの中にありますし、一生についても同様のことがいえます。七五三は神社でし、入学祈願に天神さんにお詣りし、結婚式は教会です、お葬式は仏教というサイクルがあつて、その場その場で神妙な気持ちになれるということがあります。西行ではありませんが「何ごとかおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる」という心情的な信仰が私たちの中にあります。そこに自分らしさが見つかれば、他人が何も言う必要はないのですが、それらの場所ごとでの信仰が人間を振り回すということが、往々にしてあります。例えば、どこそこへ行けば罰が当たるとか、物忌みをしたり……。京都という所は、その非常に盛んな土地柄だと思います。

それは習俗としての宗教といつてよいかもしれませんが。それによって振り回されるだけでなく、えてして人間を疎外してしまうということがあります。そんなことをすれば罰が当たるとか……。本来人間を解放していくはずの宗教が、人間を疎外してしまうのです。ですから、そういうものによって自分らしさを見つげたり、自己の主体性を確立していくということは、なかなかできません。

## 宗教的伝統について

私たちは習俗としての宗教と、本来の宗教とを区別して考える必要があるのではないかと思えます。先程の小林秀雄の定義に従えば、習俗としての宗教は人間の習慣に根ざし、本来の宗教は人間の伝統に根ざしている。習慣と伝統は似て非なるものであり、習慣とは過去の模倣であり、伝統とは自覚的に求めなければ出会えないものであるということになります。またT・S・エリオットは「伝統というものは相続することのできないものであり、欲しければ非常な努力をして獲得しなければならない」ということを言っています。

終わりになりますが、私自身のことを申しあげますと、私は親鸞の教えに聞いている者です。そして親鸞という人は、この伝統を見出すために大変苦労した人です。しかしその伝統を見出すことによって、本来の自己を確立したのです。

皆さんは、親鸞という人は浄土真宗の開山というふうにお考えになると思います。しかし果たして親鸞は浄土真宗という宗教的伝統をつくったのかというと、親鸞自身の自覚からいうと、親鸞は新しい宗教的伝統をつくったのではなくして、仏教の本来の伝統に従ったのだと思えます。それこそ徹底的に純粋に随順していったのです。そのことは例えば、親鸞という名前からもわかります。親という字は、インドの祖師の天親という人の名からとったのです。鸞と

いう字は、中国の曇鸞という人の名から貰ったのです。それで親鸞と名乗ったのです。つまり親鸞という名そのものが、伝統を表しているわけです。昔の仏教の偉い祖師にあやかって名づけたのではなく、親鸞という名そのものが、伝統に随順したという自覚の表明なのです。親鸞は仏道の真の伝統を発掘し、そこに立脚してその伝統を公開したわけです。そこには一点の私心もありませんでした。そういう伝統に徹底的にうずもれて自己を滅却し、そこに真の創造が生まれてきたということなのです。

親鸞の仏教は、一般に信心中心といわれます。しかし親鸞において信心とは、徹底的に伝統に随順することにほかなりません。信心といえば、神、仏を信ずるというように、对象的に信ずると考えられるかもしれませんが、親鸞においては、徹底して伝統に従っていくことが信なのです。親鸞はその伝統を大乘といいます。大乘に会って大信があるのだと親鸞聖人はおっしゃるのです。

こういう伝統の流れの中に自分を見出したということを、親鸞の子孫の覚如上人が「己証」という言葉でいっておられます。つまり伝統に自己が証明されたということなのです。そこに道が明らかになっていくのです。

## 宗教的伝統について

伝統を見出すということは、大切なことであると思います。しかしそれは容易なことではありません。自己の主体を確立するために伝統に聞いていくのは大変なことですが、非常に重要なことであると思うのです。

いろんなところに話がとびましたが、今日は宗教的伝統ということについて、お話しさせていただきました。失礼いたします。

—一九八七・一〇・二九—